

## 同窓会会長賞

「リバーズ」 湊かなえ(講談社)

フードビジネス学科 瀬口杏実

湊かなえ作品といえば「告白」を思い浮かべる人が多いのではないかな。2009年に本屋大賞を受賞、翌2010年には映画化もされ、その内容を知る人も多いだろう。幼い我が子を殺された女性教師が、犯人である生徒に復讐を仕掛ける衝撃的なストーリーである。彼女の作品は、読後嫌な気分になるミステリー「イヤミス」と呼ばれている。すっきりしないモヤモヤ感が苦手という人がいる一方、それ以上に病みつきになる人も多い。後味の悪さを感じながら、人々はなぜまた次の作品を手にするのか。それは彼女の心理描写のうまさにあるのではないだろうか。決して特別ではない、ごく普通の日常に潜む心の闇や葛藤を、静かに、且つくつきりと描いているのである。

本書のなかでも、主人公の心の動きが、風景やコーヒーの味・香りといった細やかな描写と相まって見事に浮かび上がっている。彼女の作品には珍しく男性が主人公である。『深瀬和久は人殺しだ』こんな一文から物語は始まる。ある事故により友人を失った青年深瀬。その恋人のもとに先の告発文が届く。同じ場所にいた4人のゼミ仲間。秘密を共有する仲間であっても、それぞれの呼び方によって微妙な関係性であることがわかるだろう。また、口裏を合わせたわけでもないのに、全員がある一部分の真実を語らなかった点は、人間がいかにか自己中心的で己の欲のために動いているかを表している。告発文を送った犯人を突き止めるべく、友人広沢について調べていくことで意外な人物に辿り着く。終盤に印象的な言葉がある。「人と人とのかかわりは、一直線上にあるわけではない。複雑に絡み合っている」これこそ物語の鍵だ。もつれていた糸が解け、新たな一步を踏み出そうとしていたその時。最後に辿り着いた真実。ちりばめられた伏線が見事に回収されたラストは完敗と言わざるを得ない。確かにイヤミス作品である。しかし「イヤミス」が苦手な人にも読んでほしい1冊だ。